

薬も上手に使いば

三郷の小さなつどい 5/26 (土) 13:30～
三郷団地集会所 参加者 24名

大場先生が、認知症の人の接し方として、「敬意をもって接すること、奇妙な言動もそのまま受け入れること、笑顔で接することが大切で、介護者の接し方によって症状が軽くすんだり、病気の進行を遅らせたりすることができる」と話されました。同じクリニックの高杉さんからは、今使われている薬の中から、「アリセプトとメモリーの効用と副作用について」説明してもらいました。

話し合いでは、奥さんを介護しているMさんが、「最近引っ越したばかりで、奥さんが落ち着かなくなり、夜もよく眠れないので、自分がうつ状態になり、薬をもらって何とか頑張っているが、限界だ」と話されました。Mさんを一人ぼっちにしないように地域包括支援センターも含めて考えることにしました。

Yさんは、最近父が亡くなり、そのショックからか、母がおかしな行動をとるようになった。「幻視があり、そこに誰かいると言ったり、昼夜逆転して、夜中に外に出て行って、近所の家のピンポンを押したりするので、目が離せない」と話されました。大場先生から、「早く診断をしてもらって、幻視などの症状を抑える薬を処方してもらった方がよい」とアドバイスがありました。

Sさんは、ご主人を介護しているが、相手との会話ができないのが一番つらい。ご主人は苦勞して育て、大人になってから中学、高校を頑張って卒業した。その時60歳を過ぎていて、それから間もなく発病してしまった。優しい人で、夜トイレに起きると必ず、「ごめんな、ごめんな」と謝るので、私は最後まで面倒を見ようと思っていると話されました。